

埋もれていた庭園

—鳥羽離宮跡—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



よみがえった東殿の苑池（西から）後方に見えるのは近衛陵多宝塔の一部。

鳥羽離宮の造営が始められたのは、白河天皇が院政を開始する前夜のことであった。造営は、約80年間続けられその間に寝殿や御堂などが次々に営まれていった。こうした寝殿や御堂の周りには、池を中心とした庭園が作られた。このような建物や庭園は、今は地中に埋まり現在その姿を地上にとどめてない。しかしながら、遺跡の

所在する京都市伏見区竹田や中島町一帯で行なっている発掘調査で、造営された当初の姿を良くとどめた庭園遺構を発見している。こうした、調査で見つけた平安時代後期の庭園を紹介してみよう。

鳥羽離宮の庭は、南殿・北殿・田中殿・東殿・馬場殿などの各殿舎や御堂の周りに作られた。いずれの庭も、池を中心としたもので、

南殿（証金剛院）→北殿（勝光明院）→田中殿（金剛心院）→東殿（安楽寿院）へと舟で行くことができた。ただし東殿には、南殿から東殿へ続いていた池とは別の独立した池も設けられていた。こうした池は、すべてが人為的に掘り下げられたものではなく、離宮が造営される以前からあった自然の池も利用している。



金剛心院・釈迦堂東側の苑池（南西から）



同左（北から）奥は荒磯風石組、手前は洲浜。

次に、田中殿と東殿の庭園について見てみよう。この2箇所の庭園は調査も比較的進んでおり、ほぼその全容が明らかになりつつある。

金剛心院は、田中殿に付属するように造営された御堂である。御堂内の中心をなす建物として、釈迦堂や九躰阿弥陀堂それに寝殿などがあげられる。池は、釈迦堂の東と南側、九躰阿弥陀堂の東側とで発見している。釈迦堂東面の釣つりの殿廊東側では、池の汀に沿って南北方向に数十個の庭石が連続して配されていた。また、その南側には、舟着場が設けられていた。一方その対岸では、滝の石組や遣水やりみずなどが認められた。釈迦堂南側においても庭石が点々と据え付けられていた。

九躰阿弥陀堂の前方の池は、南

北方向に細長く作られ、汀は釈迦堂と九躰阿弥陀堂をつなぐ建物のすぐ近くまで達していた。池の汀は極めて緩やかな勾配で、玉石を敷詰めて洲浜敷すはまじきとしていた。洲浜の上には、庭石を点々と据え付けていた。また、九躰阿弥陀堂の東側中央間にあたる部分の池には、東西方向に橋が架けられていた。このように、御堂正面の池に橋を架けることは当時流行した意匠である。こうした庭園を「浄土式庭園」と呼んでいる。このように同じ金剛心院に作られた庭園でも、釈迦堂と九躰阿弥陀堂とではその趣を異にしていることがわかる。

では、東殿の南側に設けられた庭園について見てみよう。この庭園も池を中心としたもので、北側には鳥羽天皇陵・東側には近衛天皇陵が位置していた。この池は、

すべて人力によってつくられたもので、西岸は人工的に築かれた構築物である。池の規模は、東西120 m、南北130 m、深さ70cmで、そのほぼ中央部には出島が設けられていた。池の汀は緩やかで、玉石を敷いた洲浜が見られた。汀からやや高い位置に、庭石を据え付けていたが、その数は少なく、大きさも金剛心院の石と比べるとやや小振りである。また、荒々しい石組などは見られなかったし、汀の傾斜面や池底は、白い砂礫層であった。

こうしたことから、この庭園は穏やかな景観であったことが想像される。こうした状況が生まれた背景には、鳥羽天皇が造営当初から、ここを自分の墓所にしようと計画されていたためではないだろうか。 (鈴木久男)